

[D年] 聖霊降臨節第18主日(2020年9月27日)**【旧約聖書日課】 歴代誌下 7章11～16節**

¹¹ソロモンは主の神殿と王宮を完成し、この神殿と王宮について、行おうと考えていたすべての事を成し遂げた。¹²その夜、主はソロモンに現れ、こう仰せになった。

「わたしはあなたの祈りを聞き届け、この所を選び、いけにえのささげられるわたしの神殿とした。¹³わたしが天を閉じ、雨が降らなくなる時、あるいはわたしがいなごに大地を食い荒らすよう命じるとき、あるいはわたしの民に疫病を送り込むとき、¹⁴もしわたしの名をもって呼ばれているわたしの民が、ひざまずいて祈り、わたしの顔を求め、悪の道を捨てて立ち帰るなら、わたしは天から耳を傾け、罪を赦し、彼らの大地をいやす。¹⁵今後この所でささげられる祈りに、わたしの目を向け、耳を傾ける。¹⁶今後、わたしはこの神殿を選んで聖別し、そこにわたしの名をいつまでもとどめる。わたしは絶えずこれに目を向け、心を寄せる。

【使徒書日課】**エフェソの信徒への手紙 3章14～21節**

¹⁴こういうわけで、わたしは御父の前にひざまずいて祈ります。¹⁵御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。¹⁶どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、¹⁷信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。¹⁸また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長

さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、¹⁹人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。

²⁰わたしたちの内に働く御力によって、わたしたちが求めたり、思ったりすることすべてを、はるかに超えてかなえることのおできになる方に、²¹教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々限りなくありますように、アーメン。

【福音書日課】**ヨハネによる福音書 10章22～30節**

²²そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。²³イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。²⁴すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、わたしたちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」²⁵イエスは答えられた。「わたしは言ったが、あなたたちは信じない。わたしが父の名によって行う業が、わたしについて証しをしている。²⁶しかし、あなたたちは信じない。わたしの羊ではないからである。²⁷わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。²⁸わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない。²⁹わたしの父がわたしにくださったものは、すべてのものより偉大であり、だれも父の手から奪うことはできない。³⁰わたしと父とは一つである。」

「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

歴代誌下 7章11～16節

¹¹ソロモンは、主の神殿と王宮を完成し、また、主の神殿と王宮の中に造りたいと思っていたものすべてを造り終えた。¹²その夜、主はソロモンに現れ、こう言われた。「私は、あなたが乞い求めた祈りを聞き、この所を、いけにえの献げられる私の神殿として選んだ。¹³私が天を閉ざしたため雨が降らなくなるとき、あるいは私がばったに大地を食い尽くすよう命じるとき、あるいは疫病を私の民に送るとき、¹⁴もし私の名で呼ばれている私の民が、へりくだって祈り、私の顔を慕い求め、悪の道から立ち帰るなら、私は天からそれを聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの大地を癒す。¹⁵今この所で献げられる祈りに、私は目を開き、耳を傾ける。¹⁶今、私はこの神殿を選んで聖別し、そこに私の名をとこしえに置く。私の目、私の心はいつもそこにある。

エフェソの信徒への手紙 3章14～21節

¹⁴⁻¹⁵このようなわけで、私は、天と地にあって家族と呼ばれているあらゆるものの源である御父の前に、膝をかがめて祈ります。¹⁶どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めてくださいますように。¹⁷あなたがたの信仰によって、キリストがあなたがたの心の内に住んでくださいますように。あなたがたが愛に根ざし、愛に基づく者となることによって、¹⁸すべての聖なる者たちと共に、キリス

トの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどものかを悟り、¹⁹人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることができ、神の満ち溢れる者すべてに向かって満たされますように。

²⁰私たちの内に働く力によって、私たちが願い、考えることすべてをはるかに超えてかなえることのできる方に、²¹教会により、また、キリスト・イエスによって、栄光が世々わたって、とこしえにありますように、アーメン。

ヨハネによる福音書 10章22～30節

²²その頃、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた。冬であった。²³イエスは、神殿の境内でソロモンの回廊を歩いておられた。²⁴すると、ユダヤ人たちがイエスを取り囲んで言った。「いつまで、私たちに気をもませるのか。もしメシアなら、はっきりそう言いなさい。」²⁵イエスはお答えになった。「私は言ったが、あなたがたは信じない。私が父の名によって行う業が、私について証しをしている。²⁶しかし、あなたがたは信じない。私の羊ではないからである。²⁷私の羊は私の声を聞き分ける。私は彼らを知っており、彼らは私に従う。²⁸私は彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、また、彼らを私の手から奪う者はいない。²⁹私に彼らを与えてくださった父は、すべてのものより偉大であり、誰も彼らを父の手から奪うことはできない。³⁰私と父とは一つである。」

黙想のためのノート

次主日聖書日課について

・9月27日「聖霊降臨節第18主日」の日課主題は「キリストの住まい」。聖書日課三箇所共通するのは、神またはキリストの臨在される「場」の問題であり、旧約から続く「神殿」礼拝の位置づけを巡る神学的課題でもある。

・「聖書」で取り上げられる「神殿」としてイスラエル史上最も重要な位置を与えられているのは「エルサレム神殿」であるが、それが唯一の「神殿」というわけではない。「エルサレム神殿」の起源は、モーセの時代に「掟の箱(神の箱)」が安置され祭司が執り行う祭儀の場とされた「幕屋」であり、「エルサレム神殿」は、ダビデ王がエルサレムを都とした際に「掟の箱」を安置する恒久的な場として建設を目論んだことを受け次王ソロモンが建設した(サム下6章)。ただし、同様の「神の箱」を安置する恒久的「神殿」は、士師の時代にはシロに設けられている(ヨシヤによるカナン入植後、シロに「幕屋」が置かれ、後に「神殿」と称せられているが、預言者サムエルの時代にペリシテ軍により破壊され、一時「神の箱」を奪われている＝士師18章、サム上1~6章)。一方、イスラエル史記の中には、古いアブラハム・ヤコブの時代から神と会見し礼拝をささげられてきた「聖所」がベテル、シケムなどの地にあり、祭壇が設けられてきたことが描かれている。これらの古い「聖所」や政治的意図をもって設けられてきた礼拝所は、王国史記(列王記)の中で「金の子牛像」が置かれた場所や「聖なる高台」として描かれている。これらは、北王国オムリ王朝時代のこととして描かれる「バアルの祭壇」とは別物で、明らかに族長時代以来の故事に由来するものが多くを占めているにもかかわらず、神学的には拒絶すべき「聖所」として描かれている。そこには、南王国ヨシヤ王時代の改革(前621年頃~609年頃)が「エルサレム」至上主義に基づいて遂行されたことから発した評価が含まれていると考えられるが、その後のバビロン捕囚後に進められた旧約正典(「律法と預言者」)編纂においては、現実の「エルサレム」を相対化した神学思想が軸に置かれるようになったと推察される。

・旧約正典の第一段階として編纂された「律法と預言者」(「創世記」から「列王記」まで、および三大預言書+十二小預言書)には、「エルサレム」の神学的重要性を主唱しながら、地上の「エルサレム」を相対化し、真の(神が建てられる)「エルサレム」を指向するという神学的立場(通説では、「申命記的歴史観」などと呼ばれる立場)が明確にあると考えられる。一方、旧約正典に最終段階で「諸書」として位置を得た諸文書の中には、「エルサレム」至上主義の立場を前面に押し出しているものが少なくない。それらは、「律法と預言者」の立場からは二義的なものとみなされながら、前2世紀のユダヤ独立戦争(マカベア戦争)などを経てあ

らためて支持を得るようになったものと考えられる。たとえば、聖書日課で取り上げられる「歴代誌 上・下」も、内容的に「列王記 上・下」と類似していながら、北王国の歴史を意図的に無視し、エルサレムを都とする南王国ダビデ王家の神学的正統性を主唱する意図が見て取れる。「詩編」がダビデ王に帰され、また、「箴言」「コヘレトの言葉」「雅歌」がソロモン王に帰されているのも、「エルサレム」至上主義の傾向を示すものであろう。「ルツ記」は、異邦のモアブ人ルツとの婚姻を正当化するものであり、「律法と預言者」の中心ともいえる「申命記」の立場(申23:3節以下など)からはまったく相容れないものであるにもかかわらず、ダビデ王のルーツに神意を見る英雄譚として「諸書」に入れられている(もともと、「諸書」に置かれている「エズラ・ネヘミヤ記」には、申命記的な律法至上主義とエルサレム・ダビデ王家を特別視する立場とが同居しており、「律法と預言者」とは別の仕方でも二つの立場を両立させようとしている意図が見て取れる)。

旧約日課(歴代誌下7章より)

・「歴代誌 上・下」は、すでに上述したとおり、ユダヤ教の正典中では「諸書」に位置を与えられている文書であり、「律法と預言者」とは神学的思想や立場が異なる記述が少なくない。日課箇所を含む「ソロモン王」の逸話(1~9章)に関しては、その構成は「列王記」(上3~11章)とほぼ同様であり、部分的には同じ伝承文書に基づいていると判断される箇所も少なくないが、細部における逸話の取捨選択には多くの差異が見られる。おそらく、同じ伝承を共有しながらも、別の伝承も参照して再構成された物語が、各書に採用されているのだろう(各書の示す参照資料は、王上11:41および代下9:29を参照)。

・日課箇所は、列王記上9:1以下と並行する内容であるが、日課箇所に続く17節以下(王上9:4以下)はほぼ同じ内容構成で記されているにもかかわらず、日課箇所内13~15節は列王記には含まれない内容である。ここでは、自然災害(旱魃、飢饉、疫病)に見舞われた民が神に立ち帰るならば神は災害から大地を癒されると告げられている。これは、「困った時の神頼み」と紙一重であり、列王記と一致する17節以下で告げられている「掟・定め・法」に対する遵守要求と比較するならば、民に対する要求度の低いものとなっている。別言すれば、ここには、民が十全に忠実でないとしても、「神殿」を拠り所として一片の神に対する信頼を回復するならば、神はそれに応じてくださるのだという「恵みの信仰」が示されているとみることもできる。実のところ、「律法と預言者」も、中心的思想として「申命記」的な律法遵守要求が強調される一方で、不従順な民の立ち帰る道を示される神の「英断」が随所で描かれており、日課箇所に示されるような「恵みの信仰」は、決して「歴代誌」に特有のものではない。

使徒書日課(エフェソ 3 章より)

・「エフェソの信徒への手紙」は、使徒パウロの後期書簡の一つ。聖書学者の中には使徒パウロの弟子らの手による二次創作書簡とみなす者もいるが、決定的な論拠があるわけではなく、初期教会以来、「パウロ書簡」として使徒パウロの伝承と共に読まれ、理解されてきた伝統を否定する必然性はない。日課箇所は、本書簡前半部分の終わりの区切りとして置かれた「祈り」の言葉。パウロが一定のまとまりのある教えを述べた後に「祈り」で区切り目を付けることは、しばしば見られること。

・17 節「心の内にキリストを住まわせ」という「内在のキリスト」の考えを、パウロは他の書簡でもしばしば語っている。類似の考えに、「聖霊が宿ってくださる神殿」(I コリ 6:19) という表現も用いている。パウロにとって、このような考えは、彼自身の個人的な信仰経験による部分が大きいとも考えられるが、一方で、「洗礼」を「キリストと結びつくこと」として理解する教会の信仰理解(ローマ 6 章ほか)に基づいて、彼は、「キリストとの交わりに招き入れられた」(I コリ 1:9)者に対する客観的宣言として「内在のキリスト」を示している。教会は、この客観的宣言を告げ合う機能に基づいて、「交わり」を成り立たせてきた。

福音書日課(ヨハネ 10 章より)

・日課箇所は、7 章から続いていた「仮庵祭」を場面設定としたまとまりに続く、次の場面の始まりで、「神殿奉献記念祭」が設定されている。「神殿奉献記念祭」と訳されているギリシア語は「エンカイニア」で、「新しくなって」という語義であるが、ユダヤ教の文脈では、紀元前 2 世紀のユダヤ独立戦争＝マカベア戦争(前 168～141 年)において、シリアによって破壊冒涇されていたエルサレム神殿を奪還し、異教神像を取り除いて清めを行い「神殿」として新たに奉献したことを記念して祝われるようになった祭を指している。この祭は、現代ユダヤ教に至るまで「ハヌカー」と呼ばれて 12 月ごろに祝われているが、別名、「宮清めの祭り」「光の祭り」などとも呼ばれている。主イエスの「宮清め」は、共観福音書では受難週中の出来事として伝えられるが、ヨハネ福音書では公生涯の最初のほうに置かれ、これが象徴的な意味で「神殿を破壊し、建て直す」ことを示唆するもので、さらにそのことが主イエスの「死者の中からの復活」を意味すると説明されている(2:13～22)。日課箇所の文脈では、この「神殿奉献記念祭」の場面設定の延長線に「ラザロの復活」の逸話が置かれ、それに続いて受難週の出発点へと物語が進められていくことによって、主イエスが(教会が)この祭に新たな意義付けをしようとしているのだろう。

・このような福音書記者の意図が働いたためか、前段とは場面設定の変更で区分されているにもかかわらず、描かれる内容や登場人物は前段場面と変わらず、8～10 章の主イエスの主張が繰り返されている。

来週の誕生日 (9 月 27 日～10 月 3 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-11 番「感謝に満ちて」(= I-2「いざやともに」)は、17 世紀ドイツの歌手で牧師のマルティン・リンクルトの作詞作曲。1630 年ごろ自分の子らのために食卓の感謝の歌として作ったが、著名な讃美歌作家クリューガーに見いだされて讃美歌集「歌による敬虔の訓練」(1647 年発行)に収録され有名になった。バッハやメンデルスゾーンが自曲に用いている。
- ・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツで毎年行われている全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讃美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讃美歌。
- ・21-494 番「ガリラヤの風」(= I 228 番)は、日本の讃美歌学の第一人者である由木康が 1931 年版『讃美歌』編纂に際して自ら作詞し、曲を指定して採用した讃美歌。曲は、19 世紀米国の教会音楽家メーソンが別の讃美歌(I 214 番「北のはてなる」)のために作曲したもの。

21-11「感謝にみちて」**Nun danket alle Gott**

1. Nun danket alle Gott, / Mit Herzen, Mund und Händen, / Der große Dinge thut / An uns und allen Enden, / Der uns vom Mutterleib / Und Kindesbeinen an / Unzählig viel zu gut, / Und noch jetztund gethan.
2. Der ewig reiche Gott / Woll' uns bei unserm Leben, / Ein immer fröhlich's Herz / Und edlen Frieden geben, / Und uns in seiner Gnad' / Erhalten fort und fort, / Und uns aus aller Noth / Erlösen hier und dort.
3. Lob, Ehr' und Preis sei Gott / Dem Vater und dem Sohne, / Und dem, der beiden gleich / Im hohen Himmelsthronen, / Dem dreieinigen Gott, / Als es im Anfang war, / Und ist und bleiben wird / Jetztund und immerdar.

21-419「さあ、共に生きよう」**Damit aus Fremden Freunde werden**

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit: / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / begegnest uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir er sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Einigkeit uns weist.